

第一節 神納祭

神は、結婚を望む男女の縁をつなぎ、両家を結ぶことが、結納の真理であるとお教えくださいます。神納祭では、男女それぞれに、はぐくんでくれた両親に感謝して、仏の道を通します。そこに、両家の心の道が一つになり、親族としての関係を築いていくことができます。親族同士の信頼が深まるところに、二人が仕合せな人生を歩み、両家ともに栄えていけるのです。

神納祭の深い真理を、神はこのような神歌をもって表されました。

「旅立ちの神歌」

今日までの我が道返りて 「夢」この一言 きょうの喜び

過ぎ去りし日々 思うに うれし

これからの道 思うに いとし

我と我が道 行き着く先の 幸福願うて 今日日うれしや

「眞実の光」曲げずに歩まん

神に 直使に 両親 知人に まごころ捧げて

我 幸福の道 ここに誓わん 旅立ちの神歌

人間は、十五歳ごろまでは、親の運命の中ではぐくまれていくものと、神はお教えくださいます。十五歳ごろから自分の運命が芽吹き、心身ともに成熟していきます。やがて結婚して新しい家庭を築き、家族や親族にも大きな喜びが生まれます。

今日までの歴史を見ても、結婚は当人同士だけでなく、家と家との契約という側面もっています。妻を迎える男性の家が、女性の親に贈り物をするのは、古来、多くの国で行われてきました。日本でも、室町時代に武家による父系社会が確立し、「嫁取り婚」に移行したことから、結納が始まったと言われています。庶民にまで広まったのは、江戸末期から明治初期にかけてのようです。

一般的に、以前は仲人が結納品を持って両家の間を歩き来していたものが、現代は両家が集まって一度に結納品を取り交わしたり、会食するだけで済ませたりすることも多くなっていきます。結納が始まった当初は、婚礼の宴席に必要な品々を持ち寄ったと言われ、和やかに歓談する場を設けることは、両家の心をつなぐ、結納の目的を果たしていると言えるでしょう。

結納は、結婚の約束を公にすることであり、結婚する当人たちにとっても、責任ある行動が求められます。神が神納祭の神歌を「旅立ちの神歌」と表されたように、自らの意思